

流れて蒲玉湯飯月山の東を過て宮上館を
流れ下りり田へに宮上川といふとをたぬ
よ宮上館を過て宮月入ていふ宮上川といふ
とく大川と稱して宮上川といふ
其事を宮月入流れていふ宮上川を始とし飽海
田川両郡の官を流れて社の浦より出でて記
せしきよ清川の記記いやはあんのりこといふ
ものを記ありて載させあふは川の手
なり五月の運送の便より冬月海客の記
往來の飽より事と宮上川の文面は同一

下字

況復秋田雄勝城相公已遙烽候不接又舉
納秋饗國司上下必有分頭入部變衆若赴
沼水而後泝水面還有微斃之煩更倍於尋
常運送之費將加於黎庶晏然无事之時縱
能兼濟警急不虞之日何得周施以此論之
南遷之事難可聽計須擇舊府近側高敞之
地閑月遷造不妨農務用其舊材勿勞新採
官帳之數不得増減勅宣依官職早令行
之云々

秋田雄勝ハ元月より北方に當り海田より